

鳥取県医師会長 岡 本 公 男
学会長 鳥取県中部医師会立三朝温泉病院長 森 尾 泰 夫

平成20年度鳥取県医師会秋季医学会 (日本医師会生涯教育講座)

標記の秋季医学会を下記のとおり開催致しますので、ご案内申し上げます。
会員各位始め、多数の方々にご参集頂きますようお願い申し上げます。

日時 平成20年10月13日(月)・祝 午前9時25分

場所 鳥取県立倉吉未来中心「セミナールーム3」

倉吉市駄経寺町212-5 電話 (0858) 23-5390

日程 開 会 ● 9:25

挨 拶 ● 9:25

一般演題 ● 9:30~11:14

— 休 憩 —

特別講演 ● 11:25~12:25

「呼吸器疾患のリハビリテーション

—慢性閉塞性肺疾患(COPD)と気管支喘息を中心に—

岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科 社会環境生命科学専攻

長寿社会医学講座 老年医学分野 教授

岡山大学病院 三朝医療センター長 光 延 文 裕 先生

一般演題 ● 12:30~13:51

閉 会 ● 13:51

*一般演題 25題

*日本医師会生涯教育講座認定取得単位 5単位

*このプログラムは当日ご持参下さい。

プログラム

開会・挨拶 9時25分

一般演題 口演5分・質疑応答2分 時間厳守でお願いします

1. 内科（循環器・終末期医療） 9：30～9：44 座長 平田 成正（上原クリニック）

1) 少量のKチャンネル抑制剤が著効を示した心室性頻拍の症例

老人保健施設ふたば・新生病院 内科 杉山 将洋

2) 当院緩和ケア病棟の活動状況と今後の課題

藤井政雄記念病院 緩和ケア科 足立 誠司 他

2. 内科（代謝） 9：45～10：00 座長 坂本 惠理（垣田病院）

3) 原発性ネフローゼ症候群におけるAlb値別血清脂質の検討（第2報）

鳥取赤十字病院健診センター 塩 宏 他

4) III型高脂血症を合併した糖尿病の1例

鳥取赤十字病院健診センター 塩 宏

3. 内科（胃癌） 10：00～10：14 座長 大津 敬一（大津医院）

5) 鳥取市における胃がん内視鏡検診の精度管理の実際（第1報）

鳥取市胃がん内視鏡検診検討委員会 秋藤 洋一 他

6) AFP産生早期胃癌の1例

鳥取県済生会境港総合病院 内科 佐々木祐一郎 他

4. 内科（呼吸器）・リハビリテーション科 10：15～10：36 座長 吉水 信明（吉水医院）

7) 間質性肺炎の急性増悪と自己免疫性肝炎を合併した強皮症の1例

鳥取県中部医師会立三朝温泉病院 内科 塩 孜 他

8) 慢性閉塞性肺疾患患者の運動耐容能に対する温泉療法の有効性の検討

岡山大学病院三朝医療センター 内科 高田 真吾 他

9) 鉍泥湿布による生体への有効性の調査研究

岡山大学病院三朝医療センター リハビリテーション科 渡邊 益宜

5. 内科（消化器） 10：37～10：51 座長 中本健太郎（中本内科医院）

10) 検診を契機に発見された臍性胸水の1例

藤井政雄記念病院 内科 岸本 洋輔 他

11) 熱中症に高度の肝機能障害を併発した2症例

国立病院機構 米子医療センター 消化器科 松永 佳子 他

6. 精神科・神経内科 10：52～10：59 座長 新田 辰雄（新田内科クリニック）

12) せん妄に対してAripiprazoleが効果的であった脳血管性認知症の2症例

倉吉病院 精神科 西山 聡 他

7. 泌尿器 11：00～11：14 座長 大山 行教（野島病院）

- 13) 前立腺癌放射線治療8年後に発生した二次性膀胱癌の1例 谷口病院 泌尿器科 三原 聡 他
 14) 17年の経過を経て再発した溶連菌感染後急性糸球体腎炎の1例 谷口病院 内科 野口圭太郎 他

(休 憩)

特 別 講 演 11:25~12:25

座 長 学会長 森尾 泰夫 (鳥取県中部医師会立三朝温泉病院長)

「呼吸器疾患のリハビリテーションー慢性閉塞性肺疾患 (COPD) と気管支喘息を中心にー」

岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科 社会環境生命科学専攻 長寿社会医学講座 老年医学分野教授

岡山大学病院 三朝医療センター長

光延 文裕 先生

8. 整形外科1 12:30~12:51 座 長 浪花 紳悟 (浪花整形外科)

15) 早期RA診断における抗CCP抗体の有用性の検討

たかすりウマチ・整形外科クリニック 高須 宣之

16) 関節リウマチ頰椎病変の治療経験 鳥取県中部医師会立三朝温泉病院 整形外科 小畑 哲哉 他

17) 膝関節伸展障害をきたした巨細胞腫の1例 国立病院機構 米子医療センター 藤瀬 一臣 他

9. 整形外科2 12:52~13:06 座 長 上原 信生 (上原整形外科医院)

18) 足関節内果に生じた過労性骨障害の2例 鳥取県立中央病院 整形外科 加藤 耕平 他

19) 骨粗鬆症性胸腰椎椎体偽関節の手術療法

鳥取県中部医師会立三朝温泉病院 整形外科 森尾 泰夫 他

10. 腫瘍・血管外科 13:07~13:28 座 長 岡田耕一郎 (岡田医院)

20) 甲状腺未分化癌の1手術例 鳥取県立厚生病院 外科 田中 裕子 他

21) 右上中葉スリーブ切除術を行った右上葉原発性肺癌の1手術例

鳥取県立厚生病院 外科 吹野 俊介 他

22) 当院における腎動脈下腹部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術の経験

鳥取県立厚生病院 外科 上平 聡 他

11. 消化器外科 13:30~13:51 座 長 牧野 正人 (野島病院)

23) 妊娠時の癒着性イレウスの手術経験 鳥取県立厚生病院 外科 岸本祐一郎 他

24) 最近経験した外傷性直腸穿孔の2手術例 鳥取県立厚生病院 外科 児玉 渉 他

25) 当院における大腸穿孔手術症例の検討 鳥取県立中央病院 外科 木原 恭一 他

閉会 13時51分

一 般 演 題

1 内科（循環器・終末期医療） 9：30～9：44 座 長 平田 成正（上原クリニック）

1) 少量のKチャネル抑制剤が著効を示した心室性頻拍の症例

老人保健施設ふたば・新生病院（長野県）内科 すぎやま 杉山 かつひろ 将洋

症例は80歳代女性。高血圧と脳梗塞後遺症，陳旧性心筋梗塞等の既往があり外来経過観察中に，胸部不快，めまい，全身倦怠を訴え救急にて受診し，心電図上に心室頻拍を認めた。胸部レ線上著明な肺うっ血の所見なく心エコー像に右心負荷なく，左室機能も保たれていた。総合病院循環器内科へ紹介入院し，βブロッカーに，アミオダロン100mg/日の投与をうけ洞調律となり胸部症状も消失した。CAGに著明な狭窄所見なく，良好の経過であったが，フォローアップ中に，T3，T4の低下が見られ，アミオダロンの副作用が疑われた為チラーゼンS 50mg/日投与にて正常に復した。肝機能，KL6などの値は正常を維持し，肺繊維症の兆候は見られていない。文献的に考察して報告する。

2) 当院緩和ケア病棟の活動状況と今後の課題

藤井政雄記念病院緩和ケア科 あだち 足立 せいじ 誠司
同 内科 石飛 玲子 岸本 洋輔 星野 映治
引田 亨
同 神経内科 森 望美 荒賀 茂

当院は2003年10月から緩和ケア病棟を開設し，本年度で5年を迎えようとしている。開設から現在の約350名の末期患者を受け入れ，緩和ケアを実践してきた。2006年4月より緩和ケア科を新設し本格的に活動を行っている。そこで，今回は，2006年4月から2008年3月までの2年間に入院した189名の患者を中心に，緩和ケア病棟での活動状況をまとめ，今後の課題について検討したので報告する。

2. 内科（代謝） 9：45～10：00 座 長 坂本 恵理（垣田病院）

3) 原発性ネフローゼ症候群におけるAlb値別血清脂質の検討（第2報）

鳥取赤十字病院健診センター しお 塩 ひろし 宏
鳥取市 吉野・三宅ステーションクリニック 吉野 保之

目的：臨床的には重症あるいは罹病期間が長期の原発性ネフローゼ症候群（ネ群）の場合は心筋梗塞の頻度が高く，十分な注意が必要である。前回の報告ではネ群には高頻度の血清脂質異常の合併を報告した。今回，未治療ネフローゼ症候群におけるAlb値（2.0mg/dl以上と未満）別の血清脂質を検討した。対象：対象は26名（男性11，女性15）であり平均年齢は42±18歳である。ネ群の診断は，診断基準に基づいて行った。結果：1. Alb値2.0未満群は2.0以上群に比較して，TGと動脈硬化指数が有意に高く，HDL-Cは有意に低かった。2. TCとLDL-Cには両群間で有意差は認められなかった。3. AlbとLP（a）・TCとの間には，負の相関が認められた。結語：重症なネ群では血清脂質異常（small LDL, LP（a））に血液凝固能

亢進が加わり、ACSを発症し易い事が考えられる。

4) III型高脂血症を合併した糖尿病の1例

鳥取赤十字病院健診センター ^{しお}塩 ^{ひろし}宏

患者：33歳，男性．主訴：口渇，多飲多尿．家族歴：父72歳・母52歳ともにDM・AMIで死亡，兄・姉がDMに罹患．現病歴：1987年初めて尿糖が見つかったが，放置．最近口渇，多飲，夜間頻尿，足のこむら返り，体重の減少が起こったため3月来院．眼底所見：硬性白斑，大小の出血斑あり，下肢深部腱反射消失，アキレス腱肥厚なし，手掌線条黄色腫なし．FPG 281mg/dl，HbA1c13.0%，TC346mg/dl，TG 477mg/dl，HDL-C58mg/dl，LDL-C217mg/dl，EKG：WNL，アキレス腱XP 8 mm，尿マイクロアルブミン124 μg/dl，リポ蛋白パターンはbroad βパターン．III型高脂血症を合併した糖尿病と診断．オイグルコン5.0mg/日とメバロチン20mg/日を投与し，III型高脂血症に有効であった．

3. 内科（胃癌） 10：00～10：14 座長 大津 敬一（大津医院）

5) 鳥取市における胃がん内視鏡検診の精度管理の実際—第1報—

鳥取市胃がん内視鏡検診検討委員会 ^{あふじ}秋藤 ^{よういち}洋一 松下 公紀 松浦 喜房
板倉 和資

鳥取県では平成12年度中途から胃がん住民（対策型）検診に胃内視鏡法が導入された．その中で従来は精密検査法であった内視鏡検診の精度が問われている．今回，われわれは精度管理の一環として各施設の画像評価と生検の実施についての調査を行ったので発表する．平成19年に鳥取市胃がん検診精密検査登録機関に対し，当委員会で指定した期日に撮影された2症例に対し画像評価を行った．主な評価事項は画像の網羅性，撮影条件による画像の影響，撮影方法，前処置の適切さで，総合判定はa：良い，b1：aに近いb，b2：cに近いb，c：もう一層の努力を，d：悪いの五段階評価として，コメントとして具体的改善点についても指摘した．結果は54（対象58）施設を評価し，第一回目はa：8，b1：24，b2：17，c：5，d：0施設であった．評価判定後に第二回目を実施しa：18，b1：22，b2：13，c：1，d：0施設と改善を認めた．生検実施については，日本消化器がん検診学会では胃がん内視鏡検診時の生検の頻度はおおむね10%程度が妥当であると提言している．鳥取市の組織診（生検）率は平成18年度12.0%，平成19年度14.7%と高率である．その対策として，平成20年6月，講習会を行うとともに生検標準化の試みとして10例の症例を提示し生検の実施についての調査結果を報告する．

6) AFP産生早期胃癌の1例

鳥取県済生会境港総合病院内科（消化器部門） 佐々木祐一郎^{ささきゆういちろう} 中村 由貴 能美 隆啓
佐々木宏之
同 内科 松浦 隆 藤井 義寛 矢島 浩樹
山崎 純一
同 外科 丸山 茂樹 白谷 卓 辻本 実
同 放射線科 周藤 裕治

症例は84歳女性。近医にてHCV抗体陽性のため不定期に受診されていた。同医院で血中AFP異常値を指摘されたため精査目的で平成20年1月当科紹介受診となる。当院での血液検査でもAFPは異常高値を示した。HCV-RNA定性は陰性であった。肝ダイナミックCTを施行した結果、肝には特記すべき異常所見を認めなかったが胃体上部小弯側の壁肥厚およびリンパ節腫大を指摘した。上部消化管内視鏡検査の結果、胃体上部後壁に立ち上がり急峻な表面不整の隆起性病変を認め生検にて中分化型腺癌と診断した。また免疫染色においてAFP強陽性であった。AFP産生胃癌の診断にて胃全摘術を施行した結果、病変のサイズは3.5cmで深達度がsm3の早期癌であった。術後、AFP値は著減した。AFP産生胃癌は肝転移率が高く予後不良な疾患で胃癌全体の2～9%を占めるとされている。また進行癌として発見されることが多く早期胃癌の報告は比較的まれである。今回、われわれは術前に診断しえたAFP産生早期胃癌を経験したので文献的考察を含め報告する。

4. 内科（呼吸器）・リハビリテーション科 10:15～10:36 座長 吉水 信明（吉水医院）

7) 間質性肺炎の急性増悪と自己免疫性肝炎を合併した強皮症の1例

鳥取県中部医師会立三朝温泉病院内科 塩 孜^{しお つとむ} 松田 善典 野口 善範
石飛 誠一
同 整形外科 石井 博之
三朝町 湯川医院 湯川 喜美

症例は66歳の女性。主訴は発熱、咳嗽、息切れ。現病歴では2007年7月頃より両肩等の多発性関節痛をきたす。9月初旬当院の整形外科を受診し早期関節リウマチと診断されサラゾスルファピリジン（SASP）の投与を受ける。12月頃よりレイノー現象を伴う。2008年4月下旬に紹介されて当科を受診。半月後間質性肺炎や抗Sc1-70抗体価の増加等から強皮症と診断されメタルカプターゼ等を投与される。血小板減少をきたしSASPは中止となる。6月中旬より主訴をきたし当科に入院。現症では胸部で両背下部に捻髪音を聴取し両手指に紡錘状腫脹あり。検査では血沈91mm/h, CRP6.98mg/dl, AST 70IU/l, ALT 151IU/l, ALP 1,685IU/l, 抗核抗体160倍, 抗Sc1-70, 抗体466U/ml, KL-6 1,050U/ml, 間質性肺炎の急性増悪と自己免疫性肝炎の合併と診断しステロイド剤等を投与し自他覚的に軽快。強皮症に前記病態を合併することはまれと思われるので報告する。

5. 内科（消化器） 10:37~10:51 座長 中本健太郎（中本内科医院）

10) 検診を契機に発見された臍性胸水の1例

藤井政雄記念病院内科	^{きしもと} 岸本 ^{ようすけ} 洋輔	森 望美	星野 映治
	足立 誠司	引田 亨	荒賀 茂
日立総合病院内科	石川 晶久	嶋志田敏郎	平井 信二
	岡 裕爾		

症状は無かったが、検診の胸部X-pで左胸水を指摘され、精査・加療のため受診した60歳台の男性の症例である。患者は大酒家で慢性臍炎をとまっていた。胸水の性状や胸・腹部CT, MRCP, ERCPなどで臍性胸水と診断した。絶食, IVH, フサンなどの保存的治療では、治療効果なく、酢酸オクトレオチドの投与により、胸水の貯留はかなり抑えられたが、臍臓の漏孔が閉じるまでには至らず、外科治療のため外科転科となった。臍性胸水は、胸水を指摘された場合の鑑別診断を行う上で念頭におくべき原因の一つと考え、若干の文献的考察を加えて報告する。

11) 熱中症に高度の肝機能障害を併発した2症例

国立病院機構 米子医療センター消化器科	^{まつなが} 松永 ^{よしこ} 佳子	加藤 順	菅村 一敬
	片山 俊介	山本 哲夫	
同 血液内科	但馬 史人		

地球温暖化の影響か近年の夏は猛暑が続くことが多い。われわれは夏のマラソン大会の最中に熱中症となり、その後高度の肝機能障害を発症した2症例を経験したので報告する。症例1:20代男性。主訴は全身倦怠感。7月のマラソン大会で熱中症となり点滴を受け帰宅した翌日より全身倦怠感を自覚し、その翌日当院を受診、Bil 1.7mg/dl, AST 281 IU/l, ALT 619 IU/l, ALP 165 IU/l, LDH 425 IU/lと高度の肝機能障害を認め入院となった。症例2:30代男性。主訴は全身倦怠感、嘔気。症例1と同じマラソン大会で熱中症となり点滴を受け帰宅した。翌日微熱と全身倦怠感あり点滴を受けた。翌々日も症状持続し来院、Bil 2.1mg/dl, AST 727 IU/l, ALT 1,090 IU/l, ALP 170 IU/l, LDH 808 IU/lと高度の肝機能障害を認め入院となった。比較的軽度の熱中症と診断した場合の多くは外来で点滴を行い、その後の経過観察を行っていない。しかし本症例のように数日後高度の肝機能障害を来すことがあり、患者に症状増悪あれば必ず再診するよう伝達することが重要であるといえる。

6. 精神科・神経内科 10:52~10:59 座長 新田 辰雄（新田内科クリニック）

12) せん妄に対してAripiprazoleが効果的であった脳血管性認知症の2症例

倉吉病院精神科	^{にしやま} 西山 ^{さとし} 聡	長田 憲一	永見 剛房
	香山 茂樹	田中 潔	

せん妄を呈した脳血管性認知症で、aripiprazole（以下、ARP）によりせん妄の改善が得られた症例を

経験したので報告する。症例1：85歳男性。X年10月脳梗塞後せん妄となりX年11月当院第一回目の入院。Risperidone（以下、RIS）2mgで改善し退院。X+2年2月再びせん妄となり当院2回目の入院。RISを使用するも嚥下障害から誤嚥を来し、ARPに変薬し12mgまで使用したところ、有害事象なくせん妄は改善した。症例2：93歳女性。X年11月脳出血を発症。A病院入院するもせん妄となりX+1年1月当院転入院。下肢のふらつき、嚥下困難などを認めた。せん妄に対してARPを選択し、最大12mg使用したところ、せん妄は改善した。有害事象は認めなかった。ARPは脳血管性認知症におけるせん妄に対して有効性が期待でき、有害事象の危険性も低いと考えられた。

7. 泌尿器 11:00~11:14 座長 大山 行教（野島病院）

13) 前立腺癌放射線治療8年後に発生した二次性膀胱癌の1例

谷口病院泌尿器科 ^み原 ^{さと}聡 西尾 徹也
同 内科 野口圭太郎
同 麻酔科 上平 敦 谷口 宗弘

症例：82歳，男性。9年前に前立腺癌（中分化腺癌，T1C，N0Mo）と診断。14か月のホルモン療法後，放射線治療を施行（66Gy）。以後，外来通院中であつた。平成20年5月肉眼的血尿出現，内視鏡検査で膀胱後壁に不正粘膜を認めた。経尿道切除し移行上皮癌G2の組織診断であつた。一次癌（前立腺癌）が腺癌であり二次癌が移行上皮癌で，放射線治療後8年経過して発生していることから，放射線誘発二次癌が強く疑われた。放射線治療を受ける限局性前立腺癌症例が増加しており，二次癌の発生も念頭に置く必要がある。

14) 17年の経過を経て再発した溶連菌感染後急性糸球体腎炎の1例

谷口病院内科 ^{のぐちけいたろう}野口圭太郎
同 泌尿器科 三原 聡 西尾 徹也
同 麻酔科 上平 敦 谷口 宗弘
国立病院機構 米子医療センター内科 山本 哲夫

症例：51歳，女性。17年前に溶連菌感染後急性糸球体腎炎（以下，APSGN）にて入院歴がある。6か月程度で尿所見は陰性化し，以後検診等で検尿異常を指摘されたことはなかつた。急性咽頭炎にて近医を受診した1か月後に，乏尿，顔面浮腫が出現し紹介入院となつた。入院時血尿，浮腫，高血圧を認め，検査所見ではScr 2.15mg/dlと腎機能低下併せて著明な低補体血症，ASO，ASKの上昇を認めた。臨床経過，症状，検査所見よりAPSGNと診断した。治療は安静，食事療法を基本とし，体液管理のためループ利尿薬，降圧目的にOlmesartan，Cilnidipineを投与した。APSGNの再発はまれであり，興味深い症例と考えられた。

特 別 講 演

11：25～12：25 座 長 学会長 鳥取県中部医師会立三朝温泉病院長 森尾 泰夫

「呼吸器疾患のリハビリテーション

—慢性閉塞性肺疾患（COPD）と気管支喘息を中心に—」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科社会環境生命科学専攻

長寿社会医学講座老年医学分野教授

岡山大学病院三朝医療センター長 光 延 文 裕 先生

一 般 演 題

8. 整形外科1 12:30~12:51 座 長 浪花 紳悟 (浪花整形外科)

15) 早期RA診断における抗CCP抗体の有用性の検討

鳥取市 たかすりウマチ・整形外科クリニック ^{たかす}高須 ^{のりゆき}宣行

抗CCP抗体の早期RA診断における有用性を検討したので報告する。対象：関節症状が出現し、1年以内に受診した125例（男性：29例，女性96例）を対象とした。これらのうち，RAと診断した症例は52例，分類不能関節炎（UA）と診断した症例は73例であった。抗CCP抗体値でH：（100以上），M（4.5~99），L（4.5未満）に分類し，RA群・UA群での比率を検討した。結果：RA群（H：26例，M：20例，L：6例），UA群（H：1例，M：1例，L：71例）であり，RA群において有意に抗CCP陽性例が多かった。また，リウマトイド因子と併せて検討する。

16) 関節リウマチ頸椎病変の治療経験

鳥取県中部医師会立三朝温泉病院整形外科 ^{おぼた}小畑 ^{てつや}哲哉 深田 悟 大月 健朗
石井 博之 森尾 泰夫

対象は平成10年4月から平成20年3月の間に当院で頸椎病変に対し外科的治療を行った関節リウマチ患者9例である。性別は男性1例，女性8例，手術時年齢は60~78歳（平均69.9歳）であった。RA罹病期間は8~54年（平均19.8年）であった。頸椎病型は環軸椎亜脱臼が4例，環軸椎亜脱臼+垂直亜脱臼が3例，椎間亜脱臼が2例であった。術式は後頭骨-C2固定法が3例（McGraw 2例，Magerl+McGraw 1例），C1-2固定法（Magerl）が1例，広範囲後方固定法4例，前方固定法1例であった。後頭骨-C2固定法またはC1-2固定法は比較的侵襲が少ないが後年に下位頸椎で椎間亜脱臼を発症することがある。広範囲後方固定法は固定力が強く椎間亜脱臼の発症は予防できるが頸椎可動域が極端に制限されADLに支障を来す。術式の選択にはRAの病勢，術後ADLを考慮し，慎重に決定すべきである。

17) 膝関節伸展障害をきたした巨細胞腫の1例

国立病院機構 米子医療センター ^{ふじせ}藤瀬 ^{かずおみ}一臣 南崎 剛 尾崎 まり
嘉本 光人

症例：39歳女性。平成20年8月に急な膝関節伸展障害にて近医を受診し，MRIで膝関節内腫瘍と疑われ紹介となった。初診時の関節可動域は-30度から100度であった。関節鏡視下に手術を施行した。腫瘍はACL前面の滑膜に連なって存在し，弾性軟で血管増生に富んでいた。摘出した腫瘍は3.2×2.6×1.8cm大，重さ7g，表面平滑な充実性腫瘍であり，病理組織診では巨細胞腫の診断であった。術後膝関節伸展は0度と改善した。考察：腱鞘巨細胞腫は，現在組織学的には色素性絨毛結節性滑膜炎（PVS）と同じ範疇に入れられており，本腫瘍が1つの領域として挙げられるかには議論の余地がある。急な伸展障害やロッキングの原因として関節鼠，半月損傷，前十字靭帯断端，限局型PVS，腫瘍などがあげられ，顆間腔に腫瘍

形成を来す腫瘍としては滑膜性血管腫，良性線維腫，良性滑膜腫，十字靭帯ガングリオンが鑑別として挙げられる。

9. 整形外科2 12:52~13:06 座長 上原 信生 (上原整形外科医院)

18) 足関節内果に生じた過労性骨障害の2例

鳥取県立中央病院整形外科 加藤 耕平 山本 真人 上山 高尚
服部 明典 山本 哲章 鱸 俊朗

スポーツ活動により，過大な運動負荷または生理的な運動負荷の過剰な繰り返しによって生じる過労性骨障害は，主に下肢の骨幹部に生ずることが多く，関節内に達する例は比較的多い。私たちは，最近，ランニングやジャンプなどの動作を多用するスポーツに発症するといわれる，足関節内果に発生した過労性骨障害の2例を経験したので報告する。症例1 19歳 男性 中長距離ランナー 症例2 17歳 男性 バスケット選手

19) 骨粗鬆症性胸腰椎椎体偽関節の手術療法

鳥取県中部医師会立三朝温泉病院整形外科 森尾 泰夫 石井 博之 大月 健朗
小畑 哲哉 深田 悟
益田赤十字病院整形外科 亀山 康弘

過去5年間に外科的治療（経皮的椎体形成術は除く）を行った胸腰椎椎体偽関節症例を報告する。症例は23人（男性7人，女性16人）であり，年齢は平均77.3歳，追跡期間は平均22.3か月である。偽関節の高位はL1:9椎，T12:10椎，L2, L3, L4, T10:各1椎，L4:2椎である。手術は局所痛のみの13症例にはHAブロックと他家骨による椎体形成術と椎弓根螺子を用いた後方固定術の行い，神経症状を呈する10症例には同様な手技の椎体形成術に椎弓切除術を加え，椎弓根螺子を用いた後側方固定術を行った。全例において偽関節部の局所痛，神経症状とも改善した。手術合併症としては術後経過とともにHAブロックが脊柱管内に逸脱して神経根症状を来した1例，椎弓根螺子のゆるみで体感ギブスを行った1例，除圧レベルの誤認1例，術中神経根損傷1例などがあった。術後新たな椎体骨折を7例11椎体に認めた。

10. 腫瘍・血管外科 13:07~13:28 座長 岡田耕一郎 (岡田医院)

20) 甲状腺未分化癌の1手術例

鳥取県立厚生病院外科 田中 裕子 岸本祐一郎 児玉 渉
玉井 伸幸 浜崎 尚文 上平 聡
林 英一 吹野 俊介

甲状腺未分化癌は，あらゆる悪性腫瘍の中で最も悪性度が高く，一旦発症すると手がつけられずに1年以内に死亡する患者がほとんどである。有効な治療がない中で，唯一手術で取り除くことが効果的である

と考えられている。今回私たちは甲状腺未分化癌の手術症例を経験したので報告する。症例は60代男性。主訴は左頸部の腫脹と疼痛。触診・エコー所見は甲状腺左葉の6 cm大の硬い腫瘍で甲状腺癌が疑われ、細胞診では髄様癌・低分化癌と診断された。エコー・CTにて周囲組織への浸潤や多臓器への転移性病変は認められず、甲状腺左葉切除術を行った。腫瘍は完全に切除できたが、組織型は未分化癌と診断された。術後1か月に右頸部リンパ節腫大を認め、またCTにて肺転移が確認された。右頸部リンパ節は摘出し、現在化学療法中である。

21) 右上中葉スリーブ切除術を行った右上葉原発肺癌の1手術例

鳥取県立厚生病院外科	吹野 ^{ふきの} 俊介 ^{しゅんすけ}	田中 裕子	岸本祐一郎
	児玉 渉	玉井 伸幸	上平 聡
	浜崎 尚文	林 英一	前田 迪郎

右上葉スリーブ切除は気管支形成術のうちでも定型的手術となっているが、右上中葉スリーブ切除術はまれな術式である。この右上中葉スリーブ切除に肺動脈形成を加えた症例を経験したので報告する。症例は60歳代、男性で主訴は持続する咳で当院を受診した。精査で右上葉支口と中間気管支幹が腫瘍でほとんど閉塞していた。扁平上皮癌の病理診断となった。手術所見は、開胸時右上中葉ともに閉塞状態であった。はじめに腫瘍浸潤のある右肺動脈本幹を遮断して、肺動脈を部分切除し、形成した。次いで右上葉スリーブ切除をおこなった。さらに中葉も管状切除で追加して、気管支両断端は術中迅速診断で癌陰性を得た。気管支吻合は4-0モノフィラメント吸収糸、16針で終了した。口径差のためテレスコープ吻合となった。腫瘍は5 cmで、W/D sq.c.c. p-T2N0M0, p-1Bであった。術後1.5年経過して吻合部も良好に開存し、再発を認めていない。ビデオで供覧する。

22) 当院における腎動脈下腹部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術の経験

鳥取県立厚生病院外科	上平 ^{かみひら} 聡 ^{さとし}	吹野 俊介	田中 裕子
	岸本祐一郎	児玉 渉	玉井 伸幸
	浜崎 尚文	林 英一	前田 迪郎
同 放射線科	矢田 晋作	仙田 哲郎	

従来大動脈瘤に対する治療法は、全身麻酔下に開胸開腹のアプローチで行う人工血管置換術が主体であったが、高齢かつ全身動脈硬化性病変を有する症例が大部分であり、ハイリスク症例に対してその手術適応は制限されてきた。しかし本邦でも2007年1月から腹部大動脈瘤に対する企業製造ステントグラフトが使用可能となり、その低侵襲性と安全性から、ステントグラフト内挿術 (Endovascular Aortic Repair: EVAR) は飛躍的に施行され、現在約2,000例を超えるに至っている。当院でも今回79歳男性に対してCook社製Zenithを用いたステントグラフト内挿術を経験したので具体的な術式を供覧し、その利点や現状での問題点に関して文献的考察を加えて報告する。

23) 妊娠時の癒着性イレウスの手術経験

鳥取県立厚生病院外科	岸本祐一郎	吹野 俊介	田中 裕子
	児玉 渉	玉井 伸幸	上平 聡
	浜崎 尚文	林 英一	前田 迪郎

妊娠時に発症するイレウスは比較的まれな疾患であるが、診断・治療の遅れは母体・胎児に重篤な結果をもたらすので十分精通しておくべき疾患である。今回われわれは妊娠時に癒着性イレウスにて開腹術を行った症例を経験したので報告する。症例は30歳女性、27歳時に交通事故にて開腹手術の既往があり、妊娠22週4日で腹痛・嘔吐を主訴に受診した。腹部レントゲン、腹部MRIにて拡張した腸管を認め、イレウスと診断した。保存的療法にて症状軽快を認めず、緊急開腹術を試行した。手術前直近の白血球数は13,000、CRPは0.15であった。手術所見は上腹部で小腸ループが索状物で絞扼、また拡張した子宮の背側、右卵巣付近の索状物で小腸が絞扼していた。癒着剥離、索状物切除を行った。術後母児ともに経過良好である。

24) 最近経験した外傷性直腸穿孔の2手術例

鳥取県立厚生病院外科	児玉 渉	吹野 俊介	田中 裕子
	岸本祐一郎	玉井 伸幸	上平 聡
	浜崎 尚文	林 英一	前田 迪郎

外傷性直腸穿孔は、発症早期から細菌性の腹膜炎を呈し、合併症が多いとされている。最近当科で2例の外傷性直腸穿孔手術を経験し報告する。30歳男性。反転したパイプいすの上に転倒し、肛門の2cm外側に穿通した。肛門出血、CTにて直腸穿孔を認め、緊急手術を行った。腹腔内アプローチで直腸前壁に穿孔部を認めたが、穿孔部閉鎖が困難にて、S状結腸を離断し人工肛門を造設し、膀胱前壁から後腹膜アプローチした。前立腺との境界部で穿孔部が確認でき、縫合閉鎖した。24歳男性。仕事中に肛門から直径2cmの竹が刺さった。外観からは明らかな出血は認めなかったが、CTにて直腸穿孔を認め、緊急手術を行った。混濁した腹水が中等量存在し、腹腔内から腹膜翻転部前壁に2cm裂創をみとめ、3cm追加切開し、直腸前壁の穿孔部を確認した。穿孔部を縫合し腹膜も閉じ、後腹膜下にドレーンを挿入し、S状結腸を使用して双孔式の人工肛門を造設した。

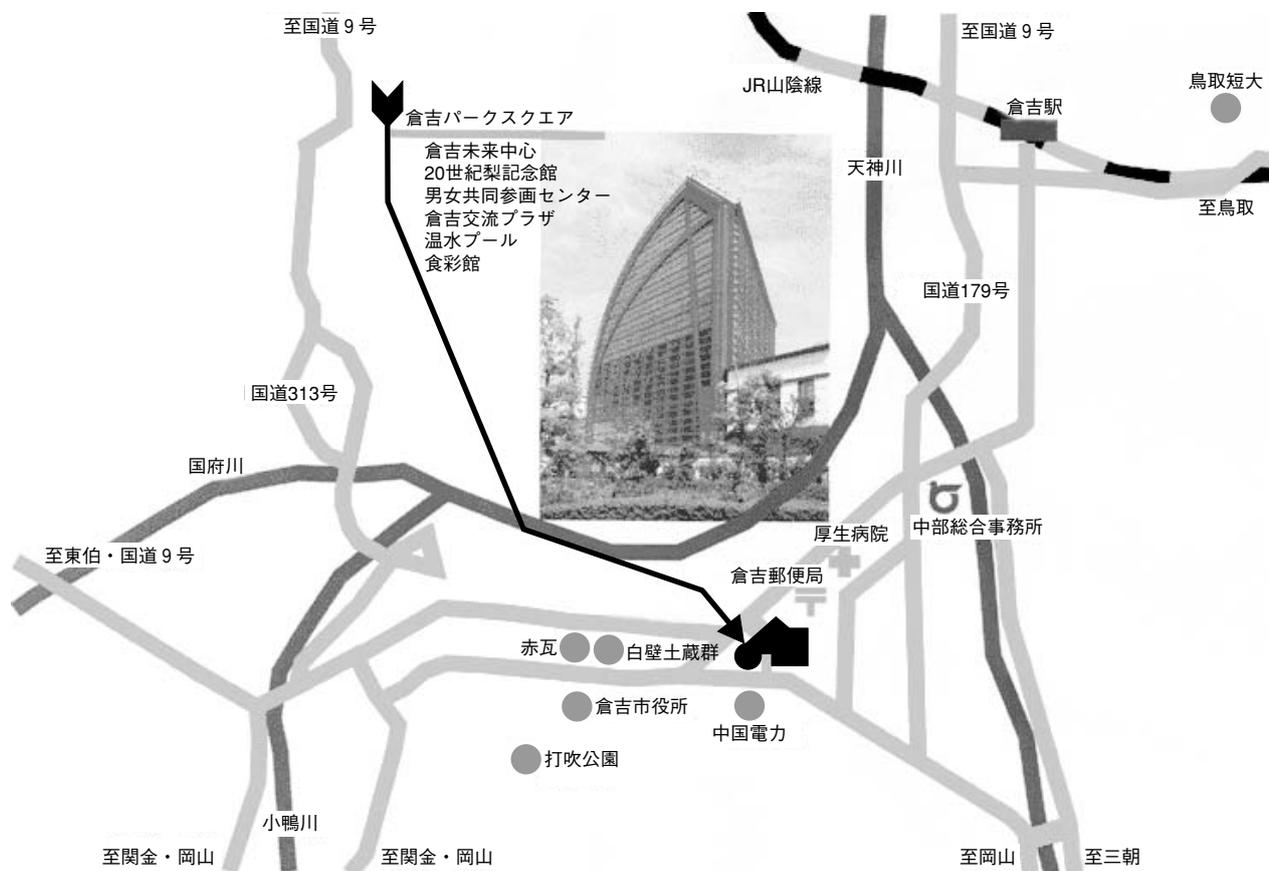
25) 当院における大腸穿孔手術症例の検討

鳥取県立中央病院外科	木原 恭一	大井健太郎	中村 誠一
	澤田 隆	清水 哲	岸 清志

大腸穿孔は上部消化管穿孔に比べ、原因や患者背景、重症度や経過も症例毎に多彩であり、判断を誤れば即座に致命的となる腹部急性疾患である。1990年1月から2008年8月までに当科で経験した大腸穿孔手

術例をレトロスペクティブに検討した。悪性腫瘍や医原性によるものを含めると男性28例，女性19例の計47例が緊急手術されていた。患者背景，穿孔部位，原因，穿孔形式，術式，経過などを比較し，若干の文献的考察を加えて報告する。

倉吉未来中心案内図



鳥取県医師会報の全文は、鳥取県医師会ホームページでもご覧頂けます。

<http://www.tottori/med.or.jp/>

鳥取県医師会報 臨時号・平成20年9月15日発行（毎月1回15日発行）

会報編集委員会：渡辺 憲・天野道磨・神鳥高世・山家 武・秋藤洋一・中安弘幸・山口由美

● 発行者 社団法人 鳥取県医師会 ● 編集発行人 岡本公男 ● 印刷 勝美印刷(株)

〒680-8585 鳥取市戎町317番地 TEL 0857-27-5566 FAX 0857-29-1578

〒682-0722 東伯郡湯梨浜町はかい長瀬818-1

E-mail: kenishikai@tottori.med.or.jp URL: <http://www.tottori.med.or.jp/>

定価 1部500円（但し、本会会員の購読料は会費に含まれています）



URL : <http://www.tottori.med.or.jp/>